
ooo after ~ 夜天の主と欲望の王 ~

a-o-w

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ooo after ㄋ 夜天の主と欲望の王ㄋ

【Nコード】

N7376Z

【作者名】

a-o-w

【あらすじ】

今までずっと一緒に戦ってきた『腕』と再び再開するため旅を続けている無欲な青年、「火野 映司」が旅の途中でたどり着いたのは、魔法文化が発達した世界、「ミッドチルダ」だった。

そこで映司は「4人の守護騎士」と、「夜天の主」に出会い、

とある事件に巻き込まれていく…。

『夜天の主と欲望の王』(前書き)

今回初めての小説の投稿です。

はつきりいつて文章力と国語力は0に等しいです。なるべく見てくださる皆様にわかってもらえるよう努力していきますのでよろしく
お願いします。

あとスマホでの投稿なので途中 ん? となる

ことがあるかもしれせん。

ご了承ください。

私の完全な自己満足な小説なので完成度は

あまり期待しないでください。

あと小説を見て、気分が悪くなった方は

閲覧をやめてください。文句、クレームも

一切受け付けません。

〈夜天の主と欲望の王〉

暗い森の中、

少し変わった格好をした

20代ぐらいの青年が歩いていていた。

「???」はあ…はあ… 完全に迷ったなあ、携帯は繋がらないし、
ここがどこなのかわからないし、はあ…」

その青年は旅をしている。

一緒に戦ってきたかけがえのない『腕』を探すために。

「???」…ま、まあなんとかなるでしょ、なんにも持ってないけど、
明日の『パンツ』はちゃんとあるし！」

青年はまた再び歩き始めた。先の見えない旅の出口を目指して…

彼、青年の名は - 火野 映司 -

またの名を、『仮面ライダーオーズ』

001話 世界の破壊者とパンツと異世界

映司「…結構歩いたなあ、でもいくら歩いても 木 ばっかりだなあ」

無欲な青年、火野 映司 は、いまだに森をさまよい歩き続けていた。

映司「お〜い、誰かあ！いませんかあ〜！？
助けてくださあ〜い！！ ……いるわけないか、
…困ったな、お前だったらどうする？」

…… - アンク - 「

映司はポケットから2つに割れた『メダル』を取りだし、悲しげな顔をしてそれを見つめる…。

映司「お前がいなくなっから、毎日が寂しいよ、アンク。いままでお前を復活させるため、いろいろな国を旅してきたけど何一つ手がかりがなかったよ…、なんかもう、やっぱり無理なのかな…」

その時、いきなり木から果物が落ちてきて、映司の頭に…、

- ゴンツッ! -

映司「…ツッ! ……いってええエエエ!!」

見事 hit した。

映司「…ははッ！ そうだよな、俺、何弱気になってるんだろっ、ごめんアंक！まだ俺諦めないから！絶対お前を見つげ出すから！」

映司は空に向かって叫びだした。

「必ず、お前を、見つけ出すからあッ！！！」

叫び終わった後、映司は落ちてきて果物を手に取り、食べながら歩き出す。

映司「よし、頑張つてこの森から抜けだすぞ！次はこっちにいつて

『おい、オーズ…』

…ん？ だ、誰！？

どこからか、声が聞こえてきた。

「…？」「こっちだ、うしろだ。」

映司「うしろ？…あ！ あなたは！？」

そこに立っていたのは、

かつて「世界の破壊者」と言われた者、

『仮面ライダーディケイド』だった。

映司「お久しぶりです！ディケイドさん！

シヨッカーの件以来ですね」

ディケイド「ディケイド『さん』ってお前…

まったくお前を呼びに『この世界』に来てみれば、お前こんなところまで何してるんだ？」

映司「いや、旅してたら道に迷っちゃって、ははッ！、…ん？俺を呼びに来たってどういう意味なんですか？」

その場の空気が一気に変わった…。

デイケイド「いいか、よく聞けオーズ…、お前はこれからある世界に行ってもらう、そしてお前には『ある事件』を解決してもらう、悪いがこれは『オーズ』にしかできないことだ、だいたいわかったな？」

映司「『だいたいわかったな？』…って全然わからないですよ！一体なにがどうなってるんですか！？だいいち、俺はもうオーズには…」

デイケイド「よし、よくわかってくれた、この世界のためにせいぜい死なない程度に頑張ってきてくれ、じゃあな。」

突如、映司の前に灰色のオーロラのカーテンが現れ、迫ってくる！

映司「ちよつとお！ 全然話聞いてないじゃないですかあ！ま、まっつて、あああああああああ…」

映司は完全にこの世界から消え去った…。

デイケイド「すまない、オーズ…、さすがに無理矢理すぎたが、本当にお前にしかできないことなんだ…。

頼むぞ、『仮面ライダーオーズ』」

森には再び静寂になった…。

「????」はやてちゃ〜ん!?!?!」

「????」ん?どないした?リイン

リイン「空から、ぱ、ぱ……。」

はやて「ぱ?」

リイン「パ、パンツが

落ちてきたんですう!?!?!?!?!」

はやて「……………はい?」

映司「…っ痛てて、なにが起こったんだ?」

映司は辺りを見回す。そこは見たことのない建物の廃墟が一面に広がっていた。

映司「…え、え?えええええ!?!?!?」

-
-
-
-
物語は始まった。

002話 騎士とヤミーと復活のオース

時はさかのぼり、ミッドチルダ
機動6課隊舎

ブリーフィングルームにて会議が行われていた。

そこにいたのは

機動6課部隊長「八神はやて」

スターズ隊長「高町なのは」

ライトニング隊長

「フェイト・T・ハラオウン」

の、3人だった。

なのは「はやてちゃん、それで話って？」

はやて「えつとな、ついこの前の事なんやけども、ミッドチルダ市
街地で殺害事件があったんや。で、目撃者の話によると、『怪物に
襲われてた』っていう証言なんよ」

フェイト「でもミッドに『怪物』なんて…」

はやて「うん、一度も確認された事はないんよ、と、いうことは、
別の世界から来たとしか考えられへん。」

なのは「待って、でも、管理局のデータベースには…」

はやて「そう、そこや、なのはちゃん。時空管理局に引っかからず
にこのミッドチルダに次元移動なんてまず無理なんよ。と、いうこ

とは、最初からこの世界にいた、ということになるんよ」

フェイト「ッ！ そんな!？」

はやて「まあ、フェイトちゃんが驚くのも無理もないなあ、とにかく、

この事件は私とヴォルケンリッターが主体となって動きます。事によつてはフォワードと隊長陣も動くことになるかもしれないので頭に入れといてください。」

なのは「& a m p ; フェイト」了解!」

- 隊舎 廊下 -

なのは と はやてが歩きながら雑談していた。

なのは「それにしても大変だよね、JS事件が片付いて一段落したと思つたら次から次へと事件が押し掛けてきて、

はやてちゃん、体大丈夫？」

はやて「なのはちゃんにそれ言われる日がくるとわなあ…。」

なのは「にやはは、でも例の事件、はやてちゃんとシグナムさん、それとヴィータちゃんにシャマル先生とザフィーラさん達だけで動くってことでしょ？未確認の生物相手にたった数人でって、いくらなんでも危険なんじゃ…。」

はやて「大丈夫、心配あらへんよ」

はやては胸をはって言った。

はやて「なんてったって私は歩くロストロギア、『夜天の主』であの子達は私を守る守護騎士たちや、なんの問題なんてあらへん！」

なのは「そっか、わかった！でもくれぐれも無茶だけはしないでね。」

はやて「ありがとう、なのはちゃん。さて、そろそろあの子達にも説明しておかんと、

またね！なのはちゃん！」

なのは「じゃあね！はやてちゃん！」

それからしばらく時間がたち、はやての周りにはヴォルケンリッタ
ー全員が集められていた。

烈火の将 剣の騎士 シグナム

紅の鉄騎 鉄槌の騎士 ヴイータ

風の癒し手 湖の騎士 シヤマル

蒼き狼 鉄壁の守護獣 ザフィーラ

それと、今は亡き『祝福の風』の名を受け継ぐもの、
リンフォ
ース？

はやて「…と、いうことなんや。皆、わかった？」

シグナム「主、はやて 確認されている怪物というのはその一体だけなのですか？」

はやて「せや、ただどくれぐれも気を抜いちゃだめや、もしかしたら増援もあり得るからなあ」

ヴィータ「まあその怪物を取っ捕まえて全部吐かせりゃそれで事件解決って事だな！」

シャマル「こら、ヴィータちゃん。女の子がそんな汚い言葉遣いしちゃ駄目でしょー！」

ザフィーラ「シャマル、突っ込むところが色々違うぞ。…主、基本はシャマルと隊舎で待機という形で良いのだな？」

はやて「せや、基本は私とシグナムとヴィータが前線にでて、シャマルとザフィーラは待機や、あ！リンもな！」

リン「了解ですう！」

はやて「それじゃあ皆、気合いいれて、任務、開始！」

ヴォルケンス「了解！」

それからまた月日がたち、現在、シグナムとヴィータがパトロールをしていた。

ヴィータ「なあ、シグナム」

シグナム「なんだ、ヴィータ」

ヴィータ「こんなところに未確認なんか現れるのかよ」

シグナム「一樣確認だ、まあ人は住んでいないがな」

今パトロールしている場所はかつてジェイル・スカリエッティのガジェットドローンと交戦があった市街地である。今はとても人が住める場所ではない。

シグナム「前に報告があつた件以来、一度も事件が起きないのも奇妙だ。できれば機動6課が解隊になる前に解決したかったのだが」

ヴィータ「そつか、試験運用期間も残り数週間だもんな、あいつらもだいぶ成長し『ええええええええ！？』、な、シグナム！」

シグナム「悲鳴というより驚き声に聞こえたが、いくぞ！ヴィータ！」

二人は急いで悲鳴？が聞こえた現場に向かった。

その頃…

映司「ちよつと待てよ！ここどこ！？ま、待て、落ち着こう、そう
だ、落ち着いて、えつと…」

ヴィータ「なんだ、一般市民か、こんなところでなにしてんだ？」

タイミングよくヴィータが空から降りてきた。

その時、なんの前触れもなく報告にあった未確認生物が襲ってきた！
シグナムはギリギリのところまでガードした。

シグナム「まったく…いきなりだな！」

ヴィータ「こいつが未確認か！おいそのへんな格好の男！死にたくなかったら早く逃げろ！」

映司「へんな格好って…、ていうか！あれって…『ヤミー』!？」

そう、報告にあった未確認生物というのはまさに『ヤミー』の事であつた。

ヴィータがグラフアイゼンを構えて戦闘体制を整えていると…

????「どこを見ている！」

ヴィータ「ツな!？」

ガキーン!

なんともう一体のヤミーも現れた!

ヴィータ「おい!もう一体なんて聞いてないぞ!？」

シグナム「くそツ!思っていた以上につよい、このまま長期戦に『よこせ…』『ツ!?!』」

ヤミー「お前達の強さを、よこせ!」

映司「このままじゃまずい！でもどうすれば!？」

その時、映司のポケットに違和感があった。

映司「な、もしかして？」

ポケットを探ると、そこには

黄色のメダルと、緑のメダルと、

- - - 割れたはずのタカメダルがあった。

映司「なんで!??どうして…」

だがその時ウィータと交戦していたヤミーが映司に襲いかかった!

ウィータ「な!しまっ…」

ヤミー『よこせエエエ!?!?!?!』

映司「ッ!?!?!」

映司はギリギリのところであわし…

シグナム「貴様なにしてる!?!はやく逃げ…」

オーズドライバーを腰に巻き付けメダルをセットし…

ウィータ「ッ!?!」

メダルをスキャンする!!

映司「変身ッ！！」

『タカ！

トラ！

バッタ！

タ・ト・バ！

タトバ！タッ！トッ！バッ！！」

シグナム「な、なんだあれは…！？」

ヤミー『オーズ…オーズウッ…！！』

今、ミッドチルダに

『仮面ライダーオーズ』が復活した。

003話 謎の声と機動6課と新たなグリード

ヴィータ「なんだ？一体何が起きてるんだ!？」

ヴィータが驚いているのも無理もない。

なにせいきなり未確認が現れて、戦闘になり、もう一体未確認が現れ、

自分を小馬鹿にした(と思っっている)変な格好をした青年が変な歌を流して上下三色の怪人?になったからである。

これにはさすがにシグナムも驚きを隠しきれない。

オーズ「変身できた!よし、いくぞ!」

オーズはトラクローを展開して…

ジャキインツ!

ヤミー『グアアッ!』

ヤミーのお腹を切り裂いて、断末魔をあげ

その場に転がり回った!

お腹からセルメダルが大量にでてきた!

オーズ「やっぱり、こいつらヤミーだ!でもなんで?グリードなら全員…」

ヤミー『なによそ見してやがる!』

倒れたヤミーが再び襲いかかって、

ドゴオ！

オーズ「うわぁッ！！」

不意討ちをくらい、トラアームのパワーが
出せなくなってしまった。

オーズ「うわぁ！トラメダルさんごめんなさい！ど、どっすれば！
？」

その時、どこからか…

『…いじ、映司！これ使え！！』

オーズ「い、今の声、どっかで…っ痛た！」

空から突然『ゴリラメダル』が降ってきた。

オーズ「ゴリラのメダル！？さっきからわけわかんない事ばっかだ
けど、これなら！」

オーズは中央のメダルを変えて、再びオースキャナーでスキャンする！

『タカ！ ゴリラ！ バッタ！』

オーズはタトバコンボからタカゴリバへ亜種チェンジをした。

ヴィータ「腕の形状が変わった!？」

ヤミー『くそ！なぜこの世界にオーズがあ!？』

オーズ「はああ！セイヤー!！」

オーズはゴリバゴーンを射出し…

ヤミー『ゲワアアアツ!!!!!!』

ドゴオンツ!!

ゴリバゴーンに当たったヤミーはその場で爆発し、大量のセルメダルを撒き散らした。

その頃シグナムは…

シグナム「ふっ、最初はどうかと思っただが、なんだ、攻撃もワンパターンで力だけではないか」

ヤミー『この女、強い！その力、欲しい!!!』

シグナム「終わらしてやる、レヴァンティン！ロードカートリッジ
！！」

ガシャコンッ！！

ヤミー『な、なにい！？』

シグナム「紫電…一閃！！！」

ヤミー『ゲワアアッ！！！！』

ドゴオンッ！！！！

ヤミーはシグナムの一撃により、爆発し、大量のセルメダルを撒き散らした。

シグナム「なんだこれは？コイン？、いや、メダルか？」

とりあえず一段落し、シグナムはオーズとヴィータに合流した。

ヴィータ「おい！！…えつと、タトバ！！」

オーズ「違うよッ！！この姿は『オーズ』っていうんだ。」

ヴィータ「じゃあさっきのタトバの歌はなんだ？自分の名前を歌ってたんじゃなかったのか！？」

オーズ「歌は気にしなくていいよ！！」

ヴィータ「気にならないほうがおかしいだろうが!!」

シグナム「いい加減にしろ!ヴィータ!!」
ポカッ!

ヴィータ「いつてエ…グスッ」

シグナム「うちのヴィータがすまなかった、とりあえず、なんだ、それを脱いでくれぬか?」

オーズ「ああ、そうですね、わかりました!」

オーズは変身を解除し、人間の姿になった。

シグナム「色々と質問したいのだが、まずお互いの自己紹介から始めよう、私の名は『シグナム』古代遺物管理部機動6課ライトニング分隊の副隊長だ」

映司「俺は『火野 映司』っていいます!それでさっきの姿は『オーズ』っていう、えっと、正義の味方ってやつかな?」

シグナム「『火野 映司』か、さっきは助かった、礼を言っぞ、火野」

映司「いえいえ、こちらこそ…『おいッッ!?!』」

ヴィータ「さっきからシカトしてんじゃねえ!私には聞かないのか!?!」

映司「ああ、ごめん!えっと、お名前はなんていうんだい?」

ヴィータ「私はヴィータ、機動6課スターズ分隊の副隊長だ。」

映司「ヴィータちゃんかぁ、かわいいお名前だね。」

ヴィータ「お前絶対子供扱いしてんだろ！」

シグナム「まあ落ち着け、ヴィータ。…火野、いきなりで悪いが色々と聞きたいことがある、私達の隊舎までついてきてくれないか？」

映司「はい、いいですよ。もともといく宛もないし、俺が今、どこにいるかさえもわからないし…。」

シグナム「すまない、今すぐ迎えのヘリを呼ぶ」

映司（それにしてもさっきの声、いったい…）

・ヘリコプター内・

ヴィータ「映司」

映司「なに？ヴィータちゃん」

ヴィータ「お前は私が殺す」

映司「ッなんで!?!」

シグナム(こいつら、見てて飽きないな…)

- 機動6課 部隊長室 -

一人、落ち着かない人間がいた。

はやて「……………」。

リン「はやてちゃん、さっきからペンで机叩くのうるさいですう」

はやて「だってなあ…、リン、さっきヴィータから連絡あったんやけどなあ、『未確認二匹でて、変な格好したやつも現れて、タトバ歌ってセイヤーして片付いたから映司つれてそっち帰るぞ!』って、…状況わかる?リン?」

リン「ヴィ、ヴィータちゃんには、なにも悪気はないですよ!」

はやて「まあその『映司』って人も気になるなあ、もしかしたら未確認についてなにか知ってるかもしれんな」

リン「あ、着いたみたいですよ!」

ヴィーン

ドアが開く。

シグナム「主、はやて、ただいま戻りました」

ヴィータ「はやて、もどつたぜえ！」

映司「こ、こんにちわ〜」

はやて「ほな、お疲れさんな。…あなたが映司さん？」

映司「は、はい！火野 映司です！」

はやて「そんな硬くなんなくてええよ、私の名前は『八神 はやて
よろしくな、映司くん！』」

映司「そうだね…、よろしく！はやてちゃん！」

それから小一時間、お互いのこと、世界の情勢のこと、オーズのこと、魔法文化のことなど話合った。

映司「知らなかったなあ、本当に魔法があるなんて！はやてちゃん
なんか魔法みせてよ！」

はやて「多分映司くんの想像してる魔法とはかなり違つとおもつわ
…てか、映司くんのその『オーズドライバー』ってデバイスとはま
た違うんか？」

映司「う〜ん…近くて、遠いのかなあ？」

そんな話もしつつ、

はやて「あ、忘れてたわ！映司くん、あの未確認生物についてなに

か知つとることある？」

映司「えっとね…、簡単に説明するよ」

その場の空気が重くなりつつ、映司は口を開いた。

映司「あれは、『ヤミー』っていう、人の『欲望』をエサにする怪物なんだ。」

はやて「欲望？」

映司「うん、いっぱい食べたいとか、お金持ちになりたいとか、綺麗になりたいとか、そんな人の欲望をエサにするんだ」

シグナム「つまり、ヤミーが生きていくには人の欲望が不可欠、ということは、その親は人間ということなのか？」

映司「察しが良いですね、シグナムさん、その通りです。」

はやて「でも、そのヤミーってどうやって生まれるん？」

映司「大事なのはそこなんだ、はやてちゃん。そのヤミーを生み出す上位に位置する者がいるんだ、それが、『グリード』」

はやて「グリード…」

ヴィータ「つまりその『グリード』がいるかぎりヤミーは生まれ続けるってことか」

映司「でも、おかしいんだ、グリードはもう全員消滅したはずなんだ」

はやて「てことは、映司くんも知らないグリードがこのミッドチルダに存在してるってことか、はあ、一件落着と思っただけど、そういうわけにもいかないようやなあ」

映司（俺の知らないグリード…、ディケイドさん、これが俺がこのミッドチルダでやらなければいけない問題なんですか？）

・とある洞窟にて・

????「あれぐらいの人間の欲望では、まだこの程度のヤミーしか生まれないか、まあいい、まさかオーズがこの世界にやってくるとはなあ、おもしろい」

????は洞窟をでて、空を見上げる。

????「邪魔はさせんぞ、オーズ。俺は必ずこのミッドチルダでやっつてやる!!!」

世界の、終焉をッ!!!!!!」

ついに謎のグリードが動きだす…。

004話 隊長陣とフォワードと新たなヤミー

ヤミーとグリードについて話会った後、

はやて「と、いうことで、グリードを退治するまで映司くんを民間協力者っていう立ち位置になるんやけど、ホントにええんか？」

映司「うん、もともとグリード退治は俺の分野だからね、それに人は助け合いする生き物でしょ！」

はやて「うん、ありがとうな、映司くん…そうや！せっかくだから映司くんにうちの部隊のメンバー紹介するわ！」

ちようど昼ごろだったため、食堂に皆集まっていた。

はやて「なのはちゃん！フェイトちゃん！」

なのは「あ、はやてちゃん！お疲れ様！」

フェイト「はやて、そちらの方は？」

はやて「紹介するわ、この人は『火野 映司』くんや、私となのはちゃんと同じ地球出身や！」

映司はなのはに頭を下げる。

映司「どうも、はじめまして、『火野 映司』です！よろしく、なのはちゃん！」

なのは「よろしくね、映司くん！」

そして、フェイトにも頭を下げようとするが…

映司「あ、ああ…」

フェイト「ど、どうしたのかな？映司？」

はやて「ん？えーじく〜ん？」

映司（な、なんだこの胸の痛み！？た、たしか前にもこんな事あったような！？フェ、フェイトさん、すごく美人だな、だ、駄目だ、ま、まともに話せない！！久しぶりの『ラブッ！ラブッ！ラブッ！ラブッ！ラブッ！』）

今、映司の心の中で、『ラブラブラブコンボ』にコンボチェンジした。

はやて「あ、駄目や、完全にフェイトちゃんに目えいつとる」

フェイト「？」

映司「あ、え、映司でし！よろしくお願ひします！フェイトさん！」

年下なのになぜか敬語になつてしまふ映司だつた。

そして、次のテーブルに向かうとなのは達より更に若い四人が座つていた。

その中の内、青いショートヘアの女の子が

いきなり映司に話しかけてきた。

スバル「こんにちわ、映司さん！さつき部隊長室通りすぎるとき、全部映司さんのこと聞いちゃいました！変わったデバイス持つてるんですって！？ぜひ、今、機動させて…『ポカツ！』…痛て、なにすんの〜ティア〜」

ティアナ「なに盗み聞きしたこと普通に話しちやつてんのよ！バカスバル！！…すいません、映司さん、怒つてません？」

映司「大丈夫だよ、スバルちゃんにティアちゃん、こんど機会あったら見せてあげるから、ね？」

スバル「ホントですか！？やったあ！！！！！！」

ティアナ「全く、救いようのないバカね…」

エリオ「ついに、ついにまともな男の人が身近に…」

キャラ「良かったね！エリオくん！」

…映司はエリオとキャロの二人を見ながらふと思った。いくら成人年齢が低いとはいえ、子供が前線に立って戦うことにはあまりいい気はしなかった。

映司（この子供は自分の意志で戦っている、俺がなにかしても恐らくこの子供の考えは変わらないだろうな、でも、あんまりいい気はしないかな）

映司「エリオくんにキャロちゃんだね、よろしく！」

エリオ&キャロ「はい！」

はやて「それと、映司くんにはまだ紹介してなかったけど、ヴォルケンリッターにはまだあと二人いるんよ」

映司ははやてと一緒に医務室に寄った。

シャマル「あら、はやてちゃん！それに、あなたが映司くんね」

映司「はい、これから少しの間、よろしくお願いします！…えっとザフィーラさんも、よろしくお願いします！」

ザフィーラ「……………」。

シャマル「ザフィーラはちょっと人見知りだからねえ、ごめんなさい…でも大丈夫！すぐ仲良くなれるわ！」

映司「はい！」

004話 隊長陣とフォワードと新たなヤミー（後書き）

うん、パンツのくだりとフェイトのくだりは蛇足だったかなあ
…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7376z/>

ooo after ~ 夜天の主と欲望の王 ~

2011年12月24日23時52分発行